

修士論文の要約

絵本の読み聞かせが親性に与える影響についての検討

人間科学研究科 博士前期課程2年 小林 優花

I. 問題・目的

親子の日常的な遊びの一つに絵本の読み聞かせがある。絵本の読み聞かせは、保育園児保護者・幼稚園児保護者の80%以上が行っていることが明らかになっており（古相・岡本, 2017）、多くの子どもたちや親にとって、身近な遊びであるといえるだろう。「子どもは絵本の読み聞かせで絵本そのものを楽しみながら、同時に大好きなおとなという幸せを感じている」（田代, 2001）と言われており、絵本の読み聞かせは、子どもたちが「幸福感」を感じることができる活動といえる。また、「想像力を育む」「言語能力を高める」「人間関係を豊かにする」といった心理的意義のある（今井・廖・中村, 1993）活動であることも指摘されている。聞き手の子どもにとって絵本の読み聞かせが幸福感や喜びを感じる活動であるならば、読み手となることの多い大人にとってはどのような活動なのだろうか。中根・中谷・小林（2020）は、親は読み聞かせ中の子どもの反応から、子どもの成長を感じ取ることや、共に楽しめている感覚やコミュニケーションをとれているという感覚を得ており、それらが親自身の楽しみ・喜びになっていることを明らかにした。子どもにとって絵本の読み聞かせが様々な影響や効果がある活動ならば、同じく読み手である親にとっても影響や効果のある活動なのではないだろうか。本研究では、親の「親性」という概念に焦点をあて検討を行う。

近年、親の性質を表す言葉として「母性」や「父性」に代わり、「親性」という言葉が使われるようになってきている。大橋・浅野（2009）は、親性を「すべての人がもっているものであ

り、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される」と定義している。また、大橋・浅野（2010）は、「育児期の親性尺度」を作成し、自己の認識にあたる「親役割の状態」「親役割以外の状態」と、「子どもへの認識」の3つからとらえ、「親役割の状態」を「子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態」、「親役割以外の状態」を「夫や妻といった役割をもち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含む」、「子どもへの認識」を「子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいだきながら接している様子」と定義した。

親の役割を獲得する時期である育児期（大橋・浅野, 2010）の中でも、幼児期は子どもとのコミュニケーションが活発になる（林, 2005）ことが言われている。その時期に絵本の読み聞かせを行っている家庭は多く（古相・岡本, 2017）、絵本の読み聞かせが幼児期の親にとって子どもと関わる際の身近な遊びの一つであるといえるだろう。その時期の親に絵本はどのような影響を与えているのだろうか。そして、絵本の読み聞かせは親にとってどのような遊びなのだろうか。

これまで、絵本の読み聞かせが子どもや親子関係に与える影響については検討されてきているが、親にどのような影響を与えているのかという研究はまだ少ない。本研究では、絵本の読み聞かせが「親性」に与える影響について検討することを目的とする。絵本の読み聞かせが親子の会話や関係を育む遊びであることから、絵本の読み聞かせ頻度や時間が、「親性」の中でも子どもとの関係に関する「親役割の状態」

と「子どもへの認識」に影響を与えているのではないかと考えた。

仮説1：絵本の読み聞かせ頻度や読み聞かせ時間の多さは、「親性」の「親役割の状態」「子どもへの認識」に正の影響を与えているだろう。

仮説2：絵本の読み聞かせの時間を繰り返しのことで、親と子どもが関わり、コミュニケーションや情緒の共有をする時間が増え、「親性」の「親役割の状態」「子どもへの認識」が高く変化するだろう。

II. 方法

II-1 研究1

絵本の読み聞かせと親性との関連や読み聞かせが親性に与える影響について検討するために、3歳児から5歳児の保護者に質問紙調査を行った。有効回答者は97名であった（平均年齢36.79歳、SD = 4.53）。調査は2022年9月～11月に実施し、Googleフォームから回答を求めた。質問紙の構成を表2-1に示した。(2)では、紙の絵本の読み聞かせに関する質問を行った。(3)は、「まったくそのとおり」「そのとおり」「どちらともいえない」「違う」「まったく違う」の5件法で回答を求め、本研究では、4項目を除外し分析を行った。

表 2-1 質問紙の構成

(1) フェイスシート
(2) 絵本の読み聞かせに関する質問 古相・岡本（2017）、ベネッセ教育総合研究所（2018）を参考に作成
(3) 子育てに関する質問 育児期の親性尺度（大橋・浅野, 2010）
(4) 絵本の読み聞かせ研究への協力をお願い

II-2 研究2

研究協力者は2名であり、現在の読み聞かせ頻度が少ないAさんと日ごろから読み聞かせを行っているBさんに一定期間の子どもへの読み

聞かせを行ってもらい「親性」の変化と読み聞かせの中でみられる親から子どもへの働きかけについて検討した。2022年11月から実施し、読み聞かせ実施の初日と最終日に質問紙への回答を求めた（表2-2）。また、読み聞かせの初日と最終日にはZoomにて子どもへの読み聞かせの様子の録画を行った。

表 2-2 質問紙の構成

読み聞かせ前後
1. 今の気分についての質問 一時的気分尺度（TMS）（徳田, 2011）
読み聞かせ後
(1) 読み聞かせ時の子どもの様子 松村・杉・宇陀（2008）を参考に作成
(2) 子育てに関する質問 育児期の親性尺度（大橋・浅野, 2010）
(3) 子どもとの関わりについての質問 親のかかわり尺度（森下・阿部, 2013）
(4) （最終日のみ）絵本の読み聞かせの感想

観察場面の分析

絵本の読み聞かせの観察の分析は、読み聞かせの撮影データから、言語行動と非言語行動の全てを逐語に起こした。非言語行動の分類は、指さしとページをめくる・閉じるという行動に焦点をあてて行った。発話の分析は、絵本の読み聞かせ中にみられる親から子どもへの働きかけに注目し、中根ら（2020）の分類を参考に、改めて定義し分類を行った。

倫理的配慮

読み聞かせの研究協力者には、事前に説明する日を設け、本研究についての説明を行った。事前説明で研究内容と、倫理的配慮、データの管理について伝え、同意書に署名のうえ研究に参加してもらった。読み聞かせ期間終了後に改めて研究についての説明を行う日を設け、全ての研究内容を伝えたくて、データの提供について再度同意を得るようにした。また、読み聞かせ期間中に何かあった場合はすぐに連絡でき

るよう、調査者の連絡先を伝えた。

Ⅲ. 結果と考察

Ⅲ-1 研究 1

絵本の読み聞かせと親性との間にどのような関係性が存在するのかと、絵本の読み聞かせが親性に与える影響を検証するために、ピアソンの積率相関係数と重回帰分析を行った。その結果、絵本の読み聞かせ頻度や 1 日の読み聞かせ時間が「親役割の状態」や「子どもへの認識」に正の影響を与えていることは示されず、仮説 1 は支持されなかった。絵本の読み聞かせは、親の心身的な余裕（真崎, 2018）に加え、日常生活の時間的余裕、子どもの気分など、様々な条件がそろったうえで行われている可能性が考えられる。そのため、家庭での絵本の読み聞かせ頻度や時間は変動しやすいものであり、質問紙を通して捉えることが難しかったのではないかと考える。また、本研究では、絵本の読み聞かせが「親性」に与える影響とは何かについて検討しているが、育児への関心が高い親が絵本の読み聞かせを子どもと関わる際のツールとしてよく使用しているという可能性も考える必要があるだろう。

一方で、親が絵本を読むことをどのように捉えているかが「親役割の状態」に影響を与えている可能性が考えられた。つまり、絵本の読み聞かせが親性に与える影響について考える際、絵本の読み聞かせを通して、子どもと関わる頻度や時間が多いか少ないかという点だけではなく、絵本を読むことを親自身がどのように捉えているのかという点を考える必要があるのではないかと考える。

Ⅲ-2 結果

繰り返すことでみられる「親性」の変化

絵本の読み聞かせ期間を通して、Aさんは「親役割の状態」と「子どもへの認識」が、Bさんは「親役割の状態」が高く変化していた。この

ことより、日ごろの読み聞かせ頻度が少ないAさんは仮説 2 を支持する結果となった。また、AさんもBさんも絵本の中で子どもに対しての新たな発見や、子どもとコミュニケーションが取れたという実感を得ていることが明らかとなった。このことより、仮説 2 は支持されたが、読み聞かせの頻度や時間といった、読み聞かせの量だけが親性を高めることに繋がっているわけではなく、読み聞かせ中にみられる子どもの反応から、親が何を実感しているのかという質的部分が「親性」の特に「親役割の状態」に影響を与えていることが考えられ、研究 1 の考察を強める結果となった。

読み聞かせの観察場面から

読み聞かせを通して、親は子どもに対して様々な働きかけを行っているが、その中でも子どもの発話や行動に対して反応を返すという親の働きかけが最も多く見られていた。このことより、親は読み聞かせの中でみられる子どもからの発話や行動を肯定的な姿勢で受けとめていることが示唆された。また、絵本のテキストを読む、ページをめくるといった行動は親が主体で行われることが多いが、絵本の読み聞かせは、親が子どもの反応を感じ取り、子どものペースに合わせて進んでいく遊びであることが考えられる。

総合考察

本研究は、「育児期の親性尺度」（大橋・浅野, 2010）の本来の項目を使用し検討することができていないため、結果の解釈には留意が必要である。しかし、研究 1 と研究 2 の結果から、絵本の読み聞かせの頻度や時間だけが親に影響を与えているわけではなく、読み聞かせを通して子どもとコミュニケーションをとれている感覚や、子どもについて知ることができたという実感が、親役割の満足感や育児への関心に繋がり、「親役割の状態」を高めている可能性が考え

られた。

絵本を用いた育児支援を考えていくためには、子どもにとって絵本の読み聞かせがどのような活動であるのかということだけでなく、親にとってどのような活動であるのかを明らかにしていく必要があると考える。また、絵本の読み聞かせは子どもだけのものではなく、親子の時間であることから、親に与える影響についても様々な視点から検討していくことが重要であると考える。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育調査」(2018)。
- 古相正美・岡本満江 (2017). 保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, (49), 25-34.
- 林昭志 (2005). 親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み 上田女子短期大学紀要, 28, 11-18.
- 今井靖親・廖小慧・中村年江 (1993). 日本と台湾における絵本の望ましい読み聞かせ方法に関する比較 奈良教育大学紀要, 42, 211-223.
- 松村敦・杉七瀬・宇陀則彦 (2008). 読み聞かせ時の反応に着目した絵本に対する子どもの好みの取得方法に関する検討 日本教育工学会論文誌, 32, 125-128.
- 真崎由美子 (2018). 絵本の読み聞かせにおける効果と臨床心理学的意義 甲子園大学紀要, (45), 55-58.
- 森下正康・阿部恭子 (2013). 母親と父親のかかわりの特徴と幼児の社会性発達との相互連関 発達教育学研究：京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要, (7), 35-47.
- 中根愛・中谷桃子・小林哲生 (2020). 子どもに対する絵本読み聞かせから親は何を得るのか 認知科学, 27, 138-149.
- 大橋幸美・浅野みどり (2009). 親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討——親性の概念明確化に向けて—— 家族看護学研究, 14, 57-65.
- 大橋幸美・浅野みどり (2010). 育児期の親性尺度の開発——信頼性と妥当性の検討—— 日本看護研究学会雑誌, 33, 45-53.
- 田代康子 (2001). もっかい読んで！——絵本をおもしろがる子どもの心理—— ひとなる書房.
- 徳田完二 (2011). 一時的気分尺度 (TMS) の妥当性 立命館人間科学研究, 22, 1-6.